



幼児グループの

研究メモから

東 安 子

私共の幼児グループは、東京女子大構内の東隅に近い小さな組立住宅の事に集ります。恰度4年程前同窓会からの提案で週二回、心理学の実験と観察の為に近所の同窓生の子供さん達に集つていただいたのがはじめでした。ですから当時は、ねずみを飼う為に造られた小舎の床にむしろを敷いて、ハンドカスターネットを拍子とりながら唱歌を教える位が精一杯の教育活動で、あとは殆ど自由遊びをしていました。先生といつても、研究室の仕事をしていた私と、二三の熱心な学生とで、皆殆ど幼児教育の経験がなかつたので、教育するよりも先ず自由な状態にある子供達の気持をありのままに捉える修練をしようと思つたわけです。そのうちに追々実験設備も整い専任の先生や、卒業した学生でそのまま先生として残つてくれる人も出来、ピアノや蓄音器、砂場、すべり台などもそろい、子供の数も増えましたが「先ず自由な状態でよく観察して」という態度は何かしら伝統のようなものになつて残つています。実験の為のグループという性質上どうしてもそうなるわけですが、教えたりしつづけたりする前に先ず一人々々をよく知るとういう心構えの先生を持つことは子供達にとつても決して悪いことではな

いと思つております。たとえば、同一の叱り方しつ方が、子供によつて違つた受取られ方をすること、或る子供には薬が効き過ぎて、萎け縮ませてしまい、又別の子供には全然効力がなく聞き流されてしまう事があるのです。こういう事を心に置いて、夫々の子供が無理なく、強制されずに自由に遊んで集団の落伍者とならないで感情の安定した発達をとげよう行くように、いじけやひねくれの種子を残さないように、という事を保育の目的としたのです。

さてひとりひとりをよく知る為には、私達が度々試みる「実験」もなかなか大きな役割を果してくれません。実験といつても別に特別な装置などを持ち出すわけではなく普殺の観察と本質的には変わらないのですが、子供が行動する場面条件、いわば舞台を、必要な事柄を知るのに都合のよいようにこちらで準備するのです。そうすると、舞台の条件を変えるのと子供の行動がどう変わるか、又同じ舞台でも子供によつてどのように行動の仕方が違うかということがわかり、子供の心理を知る上にも大も、ひいては人間一般の心理を知る上にも大

きな手掛りを与えてくれるばかりでなく、ひとりひとりの子供の傾向や状態をも端的に示してくれるのです。

私共が今迄行つて来た実験は、フラストレーションの研究が主になつています。フラストレーションというのは、何が思うように行かない場合のことです。叱られた場合、やつている事の邪魔をされた場合、競争に負けた場合、欲しい物が手に入らぬ場合などすべてフラストレーションの事態であるわけです。そこで一概にフラストレーションといつても場合によつていろいろな行動が生れてくる筈だとは誰でも考えるでしょう。ではどんな行動が？ ということになる、偶発的な観察だけに頼つていたのでは不安で、実験が必要となつて来ます。この点に関して充分に研究が進んだならば、「叱つていい場合と悪い場合」「感情の意味」「幸福と不幸」あるいは、「健全な精神」という事柄についていろいろなことがわかってくるでしょうが、それはまだまだ将来のことで、現在は、土台から、地道に積んでゆかなければならないのです。

実験を進めて行くと、はじめにねらつた結果の他にいろいろ思いがけない事や、面白い

事が起つてきます。そしてそれぞれが又ひとつと研究課題になつて来ます興味のある場合もあれば、個々の事実を追う事だけで際限もなくなり溜息が出るようなこともあるのです。例えば、フラストレーションの事態には攻撃的な行動が付きものだという理論に基いて、次のようなことをやつてみました。それは、小さい部屋に子供を呼び入れ面白い玩具(子供の好きなもの、例えば男の子には汽車、電車、女の子にはお人形とか、ままごと道具)を与える、やがて夢中で遊びはじめますが、その最中に玩具をとりあげてしまうのです。残酷なようですが、子供の日常生活に於ては似たようなことが始終おこつています。だとしたらそういう事が子供にどんな影響を与えるか、客観的にくわしく観察して正しい知識を持たなければなりません。ですから勿論漫然ととりあげるのではなく、いろいろなとり上げ方を区別し、別の子供にとられる場合、先生が命令としてとり上げる場合、他の大人がいきなりとつてしまう、いわば不当なとり上げ方をする場合というように諸種の方法で行い、部屋の壁にとりつけられた片側鏡(こちらからはただの鏡に見えるけ

れども向う側からはこちの様子がよく見えるようになつて(鏡)の向う側の観察室で観察者が記録をとり、その経過は更にテーブローダーで録音される仕組になつています。この実験の初めの意図は、子供が怒り出すことを前提にして、怒つたあとどうなるかをみるのがねらいでした。ところがやつてみると痛快な位ひどく怒り出して実験者に打つてかかる子供もいますが、一方なかなか怒りを表わさない子供もいます。更に怒らないといつてもいろいろで、「じゃあ、一寸貸してあげるわね、替りばんこにしましょう」というように建設的な解決を持ち出す子供もいます。つまらなそうに黙りこんでしまう子供、場面を逃げ出す子供、何も感じないかのように見える子供等々実に千差万別です。子供の「たち」だと云つてしまえばそれまでですがそんないろいろな「たち」を形成する条件は何なのか、どういう「たち」が望ましいのか等々と考え出すと実験は暗礁に乗り上げた形になつてしまいます。それに、実験場面で怒らない子供が生来温和なのかというとは必ずしもそうではなく、先生にとり上げられると何の抗議も解決の努力もしようとしない子供

には寧ろふだん弱いものいじめや告げ口などが多くて問題があると思わせるような子供が含まれています。目上の人のすることなら不当な取扱いを甘受する「たち」がどういふ人柄を形造るかわかりませんが、アメリカで行なわれた同種の実験の結果に比べると、どうも一般に日本の子供の方が陰性な反応が多いようです。正当な発散をさまたげられた怒りは、それならどうなつて行くのでしょうか。それとも怒りがもともと生れてこないこともあるのでしょうか。そんな事を考えて、今度、一つ怒るうらにも怒る相手がないようにしてみようと思ひました。その為には、やはり面白い玩具で夢中になつて遊んでゐる時ちよつと室外に呼んでその際に天井裏から網を下して玩具を手の届かない処に吊上げてしまひます。この方法は子供がすぐにはからくりを見破るだらうと思つてあまり期必してゐなかつたのですが、驚いたことに一人として、外に出ている間に大人が何かやつたと考えた者はいませんでした。大抗の子供が「おや？」というようにまわりを探し、その玩具が天井に上つてゐるのを見つけると先ず大笑いを始めます。この実験では2人宛組にしてやりまし

たので、2人が顔を見合せて笑つたり不思議がつたりします。汽車がスーツと壁を走つてあそこまで上つて行つちやたんだらうか」とか、「お人形ちゃん、下りていらつしやいよ」と呼びかけたりして、段々焦々して来たり、大人にとつてよとねだり出したりします。それでも知らん顔してゐると地団駄ふんだり、身体を揺つたりしますが、りという形にはならないのです。こうして「怒る相手が無い場合の反応」に何が出るかと、期待してゐると思ひがけない結果に立ち到りました。とうとう怒る相手をつくつてしまつたのです。「誰がやつたんだらう」「神様かも知れないよ」「そうだ神様だ」だんだん声が大きくなつて「神様つていやだなあ」「神様のバカヤロー」「神様のバカヤロー」これで幾分気がすんだのでしようか、二人は諦めて別の遊びにとりかかりました。

こういう風に、何かに転嫁してでも不満のはけ口を求めようとする傾向が認められる以上、それが表出されず、又別の代償の犠牲も講じられずにわだかまつてゐる事は、心にもからだにも有害だと思われれます。怒りたくなる場面では、怒りを表出してしまふ子が、後

でさつぱりとしていたり、当然腹の立つような場面で、いやに素直に云う事をきいたりする子が、いちいち実験者の顔色を見て警戒的に行動してゐたりするのに気が付きました。所謂よい子として通つてゐる子供に、大人の目にうつりのよい様に仕立てられ、無理をしてゐる子供があること、こうして抑えられた不満は、何時か、もつと正常でない形で、曲げられて現われはしないかと案じられ、子供の行動を、一人々々の自然の要求に基いてよく理解しなくてはならないと痛感しております。

(東京女子大講師)

(16頁より)「経済的負担が重過ぎる、にもかかわらず、一日の幼稚園に行く時間が短か過ぎる。この様な事では何故に幼稚園へ行くのかわからない」との意見は、親の幼稚園に対する希望と、幼稚園の立場との相違が感じられました。

その他「父親、母親に対する教育と申しますか指導をお願い致したいのです……(会社員)」「わけへだてのない様にお願ひいたします」等の希望がありました。

(お茶の水女子大学、児童学科、
幼児教育研究会)